

理屈抜きで
荒唐無稽な物語
を堪能せよ！



作家
朝松 健さん
昭和56年仏教資料系

怪奇、ホラーの分野で多くの著書を持つ伝奇作家、朝松健さんの最新作がこちら。真田十勇士が活躍する時代版ホラー三部作の完結編だ。「朧花、朧」といった日本文化の礎が大義を見失い、現代と通じるものがある室町時代に、一番興味を惹かれます」と語る朝松さん。世界情勢にも明るく、常に一個人としての問題意識をホームページで発信し続けている。「なんのために生きるか、仏教的なテーマにはいつも関心がありま

す」。

「好きこそもの上手なれというが、朝松さんほど『好き』に一本筋が通っている人もいないだろう。札幌一の歓楽街、すすきの育った少年時代、怪奇映画に出合った。『立時、場末の映画館といえはアクリンヨンエロ、怪奇が本柱。中でも父が紙芝居仕立てで説明してくれる怪奇映画には夢中になりましたね。』高校時代には早くもホラーの同人誌サークルを立ち上げ、国産の怪奇小説、翻訳ものが少なかった当時、自ら原書を海外から取り寄せて、進学先を東洋大に決めたのは明治時代に妖怪学部を作ろう、と大真面目に説いていた井上円了という人物を知り、この人が作った大書に入りたかったからだ。



「関・真田神妖伝」(祥伝社)
1,350円

念願叶い、入学後は神祕思想研究会を発足させ、魔術と易の研究に励んだ。「3人集まれば酒を酌み交わす毎日だった」とパンカラ時代を懐かしむ。卒業後、出版社勤務を経て86年に少年小説でデビュー。以後、年間3〜5冊を精力的に発表し続け、扱うジャンルも大人向け、歴史小説、ミステリーと広げていった。ところが、そんな矢先に生死をさまよう大病に見舞われてしまう。過酷なリハビリを経て、奇跡的に復活を遂げたいま、「前より人を見目が優しくなり、人物描写の興行きが広くなりました」と穏やかに語る。

「やりたいことを持ち続ければチャンスは誰にでも訪れます。それに乗るか乗らないかは自分次第。はじめてくもあそびえ立つていた壁もつがっついていくと壊れていきますよ」と学生にエールを送った。

あ の 人 こ の 人 S T U D E N T

「高校野球は空の色」 移ろう一瞬の輝きを追いかけて



高校野球を追い続ける

安田未由さん
(社会学科2年)

高校野球が好きで好きでたまらない。その気持ちひとつで今紹介する「高校野球は空の色」を自費出版するに至ったという安田未由さん。本学の硬式野球部OBが指導する高校8校を含む、11校の野球部を取材し、その記録を約100ページの本に収めた。ただし、内容ではない。よほどチームの近くで取材しないと描けないドラマの数々。この本は、各校のもう一人のマネージャーが書いた、チームの成長記と言ってもいい。

安田さんが高校野球に目覚めたのは高校生の時。大学に入学しても高校野球熱は冷めることなく、昨年の6月から高校巡りを始めた。自宅から一番近い高校を皮切りに、北は群馬県から、南は兵庫県まで駆け回る。1ヵ月に1度は各チームを訪れ、監督の教育方針、チームの雰囲気や、選手の表情の変化などを克明に記録した。



この本に関する情報、購入を希望する方は下記までURL <http://www.geocities.jp/koukuyakyuuhasoranoino/index.htm>

「この記録を本にしようと思ったのは今年3月。本をつくるという理由で取材に行けば、快く受け入れてもらえたんで、それを毎回口にして、たら、自分は本をつくるんだという強い気持ちに変わってきました」。

費用はもちろん自腹。Twitterは「取材時の試合を振り返ってみると、天気の良いイメージが強く残っていたから」という理由で決めたという。

最後に高校野球に惹かれる理由を聞いてみた。「高校時代は人生で一度きり。だから選手たちは一生懸命練習します。その表情が輝いて見えるんです」そんな安田さんは、最近ある事に気付いたという。「高校野球を追っているうちに、自分も野球に限らず、部活を通して人間的に成長する選手の姿、さらにはそのプロセスが好きなんだと気付きました。昔から教育問題に興味があったし、そういうことも関係あるかもしれないですね。だから、今後は高校ラグビーや、吹奏楽部なども取材してみたいです。ね。今はとりあえず一休みです(笑)」そんな構想が練られるのか、次回作が楽しみです。